



# Associated factors of psychological distress among Japanese pediatricians in supporting the bereaved family who has lost a child

Setou, Noriko

---

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2013-03-25

(Date of Publication)

2013-08-05

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5834

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005834>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文審査の結果の要旨

論文内容の要旨

氏名	瀬藤乃理子		
論文題目	Associated factors of psychological distress among Japanese pediatricians in supporting the bereaved family who has lost a child (子どもを亡くした遺族の支援における小児科医の心理的負担感に関連する要因) (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)		
	区分	職名	氏名
	主査	教授	高田 哲 印
	副査	教授	橋本健志 印
	副査		印
	副査		印
要 旨			
<p>子どもを亡くした遺族の悲しみは深く、悲嘆が長期化したり、複雑化することがしばしば認められる。これらの家族に対する支援において、子どもの死に関わった医師からの働き掛けは、家族の心理的回復課程において大きな役割をもつことが知られている。一方、これらの支援の中で医師自身が抱く心理的負担感についての研究は、日本では、ほとんどなされていない。今回の研究によって、①日本の多くの小児科医が何らかの形で遺族支援に関わっていること、②医師の心理的負担感に影響を及ぼす要因として、性別、経験年数、対処方法の有無、無力感の4項目が関与していることが明らかとなった。本研究は、主として、子どもの死に遭遇する機会の多い小児神経科医、新生児科医175人を対象としたものであり、それを小児科医全般に広げることの問題はあるが、今後の小児科医師養成に関わる重要な課題を提議している。統計学的手法、解析方法についても適切であり、本研究の成果は、今後の遺族支援の在り方にも大きな影響を与える重要なものと考えられる。本研究は、子どもを亡くした遺族の支援における小児科医の心理的負担というこれまであまり省みられなかった課題を研究したものであり、今後の医師教育・遺族支援における重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の瀬藤乃理子は、博士(保健学)の学位を得る資格があると認める。</p>			
<p>掲載論文名・著者名・掲載(予定)誌名・巻(号), 頁, 発行(予定)年を記入してください。 Associated Factors of Psychological Distress among Japanese Pediatricians in Supporting the Bereaved Family who has lost a Child・Noriko Setou, Satoshi Takada・Kobe J. Med. Sci., 58(5), 2012 (印刷中)</p>			

専攻領域 看護学  
 専攻分野 家族・在宅看護学  
 氏名 瀬藤乃理子

< 論文題目 >

Associated factors of psychological distress among Japanese pediatricians in supporting the bereaved family who has lost a child  
 (和訳: 子どもを亡くした遺族の支援における小児科医の心理的負担感に関連する要因)

< 論文内容の要旨 >

【目的】

子どもを亡くした遺族の支援において、子どもの死に関わった医師らの関わりが回復の大きな助けになることがある。しかし一方で、支援による医師らの心理的負担が重要な課題となっている。本研究では、実際に遺族支援の経験のある小児科医の心理的負担感に関連する要因を明らかにし、現状の問題点から、医師らが行う遺族の支援のあり方について検討を加える。

【方法】

ハイリスク児フォローアップ研究会と小児神経学会に所属する医師に対し、郵送調査を行い、その中から遺族支援の経験のある人を抽出し、心理的負担感が高い群と低い群に分けた。心理的負担感を従属変数、性別・経験年数・対処方法の有無・遺族支援への関心・遺族支援による無力感・疲労感の増大・研修会の希望・専門家との連携の希望の8項目を説明変数とし、ロジスティック回帰分析でオッズ比を算出し、心理的負担感に関連する要因を分析した。

【結果】

返却された239名(回収率42~45%)のうち、遺族支援の経験者の分析対象者は175人であった。分析の結果、心理的負担感に関連する要因は「性別」「経験年数」「対処方法の有無」「無力感」の4項目であり、負担感の高い群では、女性が多く、経験年数が少なく、対処方法を持っておらず、無力感が強いという結果であった。

【考察】

多くの小児科医が、子どもを亡くした遺族への支援に高い意識をもっているが、その支援に高い負担感を感じている人たちへの対策が必要である。小児科医の支援が遺族に役立っていることを伝え、無力感の軽減をはかるとともに、研修を希望する人には支援に伴うストレスへの適切な対処方法やセルフケアに関する啓蒙が必要である。特に女性や経験年数が低い医師らに配慮が必要である。

< 指導教員氏名 > 高田哲教授